達富教授の「学びどき・教えどき」
中学校国語

本研究をまとめるに当たり、佐賀大学の達富洋二教授に御助言を頂きました。御助言頂いた内容を「達富教授の『学びどき・教えどき』」として執筆していただきました。

①　学習課題・学習計画

学習課題を「指導事項」「思考操作」「言語活動」の３つのことがらを組み合わせて設定してみてはどうでしょうか。まず、つける力を学習指導要領に示されている指導事項に準拠して明確にすることです。次に、生徒がそれを主体的に学ぶことができるのにふさわしい言語活動を設定します。そのときに、その言語活動を価値ある学習として実現するための思考操作を具体的に示すことを忘れてはいけません。「指導事項」「思考操作」「言語活動」の順に一文にすると子どもに伝わりやすいようです。

中学校 2 年の小説を「読むこと」では、「作品を読み登場人物の行動や考え方について自分の考えをもつ」学習を設定することがあります。この場合であれば《【指導事項】メロスの行動や考え方について共感できたところや違和感をもったところの自分の考えを、【思考操作】複数の描写や会話を取り出して場面の変化と関連させて比較し、【言語活動】新聞の書評欄のように書く。》というように設定すると分かりやすいと思います。

②　言語活動の設定

何よりも大切なことはその単元を通してつける力を選び明確にすることです。そして、その力が効果的につくと考えられる言語活動を設定することです。その後、それに必要な時間や学習材、てびきなどの詳細を検討することになります。

言語活動は学習指導要領や教科書に示されている例も大いに参考になりますが、生徒の学習経験や興味関心、適時性、地域性などにもよりますから、柔軟に設定するほうがいいでしょう。新聞や雑誌、インターネットなどが参考になりますし、本屋や文具店、デパートを歩くだけでも言語活動になる素材は容易に見つかります。そして、言語活動がほぼ決まれば、まず教師がその言語活動を行ってみることです。実際にやってみることなしに成功はあり得ません。自らが体験することで、その言語活動の魅力も課題も見えてきますし、具体的なてびきの必要性も実感できます。

③　ふみ込んだ課題

生徒が自ら課題を発見し、その課題の解決に向けて主体的に協働して学ぶような学習をめざすことが大切ですが、そのために、一問一答の問題を繰り返すのではなく、深い思考をするにふさわしい値打ちのある課題に向かって学習を連続させ、その過程で発見した学びの成果を自ら意味づけてひとまとまりのものとして表現する課題を設定してみてはどうでしょうか。

簡単な質問を繰り返すことで定着を図ることもありますが、ふみ込んだ課題（深い思考をいざなうような課題）を設定し、学び合う場面を設定することも必要です。ふみ込んだ課題を解決しようとするからこそ、自分が学習計画を立てることや自らの問いをもつことにも真摯になります。

④　教師の模擬学習（評価規準の設定）

わたしたちは授業の前に模擬授業をすることがあります。もちろんここから学ぶことも多いのですが、ともすれば教師の都合だけの時間配分の練習になってしまうことがあります。生徒の学びから外れてしまえば効果はありません。模擬授業とともに模擬学習をしてみませんか。課題を解決するために、単元の学習計画はこのままでいいか、この時間でできるのか、長すぎて学習の勢いがなくならないか、グループで何をすればいいのか具体的にわかるのか、学習プリントが丁寧すぎて考える余地のないものになっていないか、考える手がかりが示されているのか、など、生徒の立場に立つと、たちまち再考しなければならないことが明らかになります。

模擬学習は評価の規準や評価の方法を考えることにも有効です。生徒の身になって考えてみれば、評価規準表は生徒に示すべきであることは明らかですし、教師としてどのようなてびきを作成しなければならないかも具体的に見えてきます。

⑤　ふりかえり

ふりかえりは形式的になりがちですが、形式的なふりかえりを続けることで量的な成長が見えてくることもありますのでこれを継続することも大切です。しかし、ふりかえりを言語活動化することで学習の意味的な定着を図ることも可能です。

ふりかえりの方法として、ノートを「学習の記録帳」として、形式的なふりかえりと意味的なふりかえりを蓄積することが考えられます。形式的なふりかえりとして、指導事項や思考操作などを表す学習用語を使ったふりかえりを続けることがあります。思考操作や学習用語の累積によって、量的な成長が自覚できます。意味的なふりかえりとして、固定化しないふりかえり方の提案があります。「分かったことを書く」「分からないことを書く」「問題を作る」「学習したことの誤答を書いてそれを修正する」「教える者と教えられる者を想定し往復書簡を書く」など、ふりかえりを言語活動化することで生徒の主体的な自覚化を図ることができます。